

第7分科会②

協議 題 いじめや不登校等に適切に対応できる体制の整備と、高い危機管理能力をもつ組織・体制づくり

研究テーマ 「笑顔であいさつ八幡っ子」の実現を目指して

提案者 鹿児島県鹿児島市立八幡小学校 校長 下古立 浩

1 はじめに

本校区は、県都鹿児島市のほぼ中央に位置している。ほぼ中央を南北に国道225号線が通り、西側を市電の走る県道、東は錦江湾にのぞみ、北側に甲突川が流れ、南側は県庁に接する場所に位置している。落ち着いた住宅のある地域と新しい街づくりが進んでいる海側の地域からなっている。進学する中学校の近くには史跡もいくつかある。

また、鹿児島大学水産学部、市立図書館、科学館、市立文化ホール、県立水泳プール、県立野球場、県立陸上競技場、武道館、報道機関等、教育に大きな影響をもつ施設も多い。

一方、海側の地域は、埋め立てによって造られた比較的新しい土地であり、商業施設、飲食店、ホテルなど多い。

2 主題設定の理由

本校は市内の中央にあり、商業施設や娯楽施設などが校区には多くあり、その環境から生徒指導上の課題がある程度想定されるが、令和3年度にこの学校に赴任した際、前年度（令和2年度）の問題行動の状況は、万引き、家出、暴力等の非行などは0件、不登校は4件であったと引き継ぎ、問題行動等については、少ない状況であることが分かった。

本校はこれまで伝統的に「笑顔であいさつ八幡っ子」をキャッチフレーズとして掲げ、「あいさつ」の徹底を目指してきている。（以下、本校で身に付けさせたい挨拶を「あいさつ」と表記する。）この伝統的な取組が、本校の問題行動の少なさに関係している可能性は考えられる。しかし、「あいさつ」自体に目を向けると、全校児童がしっかりあいさつできるとまでは言えないのが赴任時の状況であった。

キャッチフレーズのもと、八幡小の児童は、伝統的に笑顔で挨拶できる児童であってほしいと考え、赴任時より現在まで「あいさつ」の徹底を核に学校経営を進めているところである。

「あいさつ」指導の徹底は、児童の成長を促すなどの発達支持的生徒指導を展開することとなり、いじめや不登校等の生徒指導上の課題の解決につながることを期待できると考える。

そこで、「あいさつ」指導を軸に生徒指導上の課題への対応を意図する本主題を設定した。

3 研究の視点

- (1) 本校の生徒指導の課題と対応は、どのようなものか明らかにする。
- (2) 本校における「あいさつ」指導の歴史や「あいさつ」指導とは何かを明らかにし、学校経営において「あいさつ」指導を実践的に行い、その成果と課題を探る。

4 研究の実際

(1) 本校の生徒指導上の課題

本校の令和2、3年度のいじめの認知件数については、以下のとおりである。

		令和2年度	令和3年度
認知 件数 / 1000 人 当 たり	国	420,897 /66.5	500,562 /79.9
	県	6,470 /72.8	7,379 /83.9
	市	500 /15.1	706 /21.5
	本校	14/22.2	5/7.9

国や県に比べ、認知件数が非常に少なく、教員のいじめに対する認識や認知を正確に行うことが課題と考えられる。

(2) いじめ防止対策の取組について(令和4年度)

本校で策定している「八幡小いじめ防止基本方針」などの本校の防止対策方針や計画を改めて職員が確実に共有する必要があると考え、次のような取組を行った。

① 職員による方針の共有の流れ

4月	本校のいじめ防止基本方針といじめの認知体制についての確認
各学期1回	いじめ・不登校対策委員会及び拡大対策委員会（全職員）での認知や対応状況、校内体制確認
2月～3月	次年度の教育課程編成に向け、生徒指導部員で内容検討

② いじめの早期発見、早期対応について

ア 毎月のいじめアンケート及び各学期1回「学校楽しいと」を使い、児童の心の状況を把握するアンケートを実施

イ 週1回、各学年の学年会の場において情報共有を行い、対応状況の相互確認を実施

(3) いじめ防止対策の組織、体制について

① いじめ・不登校対策委員会

校長、教頭、3主任、学年主任、該当担任、養護教諭をメンバーとし、児童の問題行動等について、情報を共有し、必要な支援等の検討を行い、早期発見・解決を目指すことを目的に設置している。これに加え、学期1回、拡大対策委員会(全職員参加)を開催している。

② 学年会

毎週水曜日の放課後、学年会を実施している。この中で児童の問題行動等について、情報を共有し、月1回「いじめ実態調査」様式に、学年会で検討したものを記入し、生徒指導主任に提出するようにしている。

(4) 令和5年度版いじめアンケート

このような取組の結果、令和4年度の認知件数は15件、1000人当たりは24.6と増えた。しかし、これまでの全国、県、市の平均から考えると、まだ十分とは言えない。そこで、本年度は4月のいじめ防止基本方針の共有の場において、特にいじめ認知の重要性について再度、確認した。また、月1回のアンケートをタブレットを用いて、記入、集計しやすいように工夫し、正確な認知ができるように取り組んでいるところである。

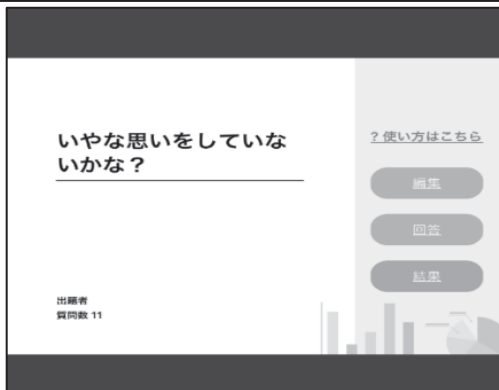
【質問例】

八幡小令和5年度版いじめアンケート「いやな思いをしていないかな？」

【1】学校や学級は楽しいですか。

【2】最近、あなたはだれかにいやなことをされたり、いやな思いをさせられたりしましたか？

…(以下略)



【資料1 令和5年度版いじめアンケート画面】

(5) 「あいさつ指導」とは何か。

学習指導要領を見ると、小学校学習指導要領解説総則編において、第3章第6節の「2指導内容の重点化」に「第1学年及び第2学年においては、挨拶などの基本的な生活習慣を身に付けること、…(略)」と児童の

発達段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図る際に、低学年において重点化するようになっている。

小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編では、第3章Bの「9礼儀」で挨拶の記述が多く見られる。第1学年及び第2学年の目標を「気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく過ごすこと」とし、この低学年の段階において、「はきはきした気持ちのよい挨拶」を身に付けることの大切さを指導の要点としている。

また、この「礼儀」の項目では、中学年で挨拶について、相手の立場や気持ちに応じた対応ができることやその大切さを考えさせる必要があることを、高学年では相手の立場や気持ちを考えて心のこもった挨拶などができることや挨拶などの礼儀が社会生活に欠かせないものであることを指導の要点としている。

学校における道德教育は、道德科を要として学校の教育活動全体を通じて行われることから、本校においては、あらゆる教育活動の中で意図的に「あいさつ」指導を進めているところである。

学校における「あいさつ」指導は、往々に機械的、形式的、義務的に挨拶をさせる指導になりがちである。これを全ては否定しない。挨拶は日常的な行為であり、場面によって求められる行為であることから、「形から入る」ことも視野に入れて指導したい。

しかし、機械的、形式的、義務的な挨拶は、一時的にできたとしても将来にわたり身に付くものではないと考える。そこで、挨拶の意味や意義についての指導も併せて行うことが肝要だと考える。

(6) 本校のキャッチフレーズの歴史

「笑顔であいさつ八幡っ子」は、伝統的に本校のキャッチフレーズとして掲げられているが、いつから取り組まれているか。その歴史等について本校の学校要覧で確認してみることとした。

過去の学校要覧によると、最初に学校経営の中に、「笑顔であいさつ八幡っ子」と表記されているのは、平成12年度の学校要覧であった。その後、現在まで学校経営の中に位置付けられていることが確認できた。また、それ以前においても明記はないが、類似した表現等があることから、本校は「あいさつ運度」に20年以上にわたって取り組んできていることが分かった。

(7) 学校経営における「あいさつ」指導の位置付け

令和3年度に赴任して、赴任1年目から「あいさつ」指導に取り組んでいる。2年目からは「あいさつ」指導が学校経営の要であることを明確にするために、学校経営のグランドデザインの中央部に位置付けてきた。

具体的には、グランドデザインの中心に「心の教育」、「キャッチフレーズ：笑顔であいさつ八幡っ子」を位置付け、「あいさつ」指導を「心の教育」の核としながら、「心の教育」の充実を図り、その指導が学習面や体力面へと拡がり、教育活動が充実していくという経営方針をイメージ化したものとした。

この経営方針については、前年度1月の教育課程編成時と新年度4月の最初の職員会議で職員に伝えた。また、本校はコミュニティスクールであることから、学校運営協議会においては、前年度2月の第4回の会と新年度6月の第1回の会において、委員に説明し、承認を得てきている。

4月の新年度最初の職員会議では、職員に「形としてのあいさつ」が最初の指導の段階にあってもよい、「形を教えることは、やがて心も育てることにつながる」と考えていると指導した。

(8) 児童に直接話をする場での実践

校長として、全校朝会、始業式、終業式など児童に直接話す機会のほぼ全ての講話で「あいさつ」の話を入れている。

まず、1学期の始業式で、八幡小のキャッチフレーズが「笑顔であいさつ八幡っ子」であり、この1年しっかり挨拶することを頑張ってもらいたいと児童に呼びかけた。

その後、4月末の全校朝会では「あいさつ」の意味や意義について、以下のように話をした。

さて、「どうして、あいさつするのでしょうか？」そもそも、「なぜ、私たちヒトは、あいさつをするのでしょうか？」それは、「その人が、そこにいることを、わたしはわかっているからね。」の合図なんです。(中略)

だから、「ちゃんとあいさつをしましょう。」、「ちゃんとあいさつ」というのは、「明るく元気なあいさつ」、「相手の目をみてしっかりあいさつ」といろいろ大事なことを守ったあいさつです。そんなあいさつができると、「八幡小はもっともっとよい学校になります。」頑張ってください。

4月当初から挨拶という行為を行うことの大事さを児童に呼びかけてきたことから、次の段階として、このように「あいさつ」には、意味や意義があることを児童に伝えた。

その後の全校朝会等においては、本題に入る前に、必ず「あいさつ」のこと、例えば、いい挨拶ができた児童のことや立ち止まっただけの挨拶ができる児童が増えてきたことを賞賛するなどして、意識付けを図ろうとしている。

また、この本校での「あいさつ」への取組については、機会あるごとに、保護者にも周知し、家庭での協力をお願いしている。

このように、一つのことを繰り返し話すことは、地道な手法であるが、着実に児童の意識付けにつながるのではないかと考え、実践を続けている。

(9) 朝のボランティア活動等における児童の「あいさつ」の取組

本校では伝統的に、児童が朝のボランティア活動に取り組んできている。そのうち、生活安全委員会の児童を中心に、朝7時30分頃から8時頃まで、校門で「あいさつ運動」に取り組んでいる。高学年児童が、登校してくる児童を見本となる「あいさつ」で迎えることは、「あいさつ」の日常化という効果をもたらしてくれている。ここに校長及び数人の職員もボランティアで毎日参加し、「あいさつ」指導を行っている。

また、昨年度の児童総会では、「みんなの学校をよくするためにどうすればよいか」というテーマで総務委員会を中心に話し合い、児童会目標が、「やさしい笑顔、はきはきと、たちどまってのあいさつ」と「やはた」の文字を取り入れたものに決まった。さらに、この児童会目標をもとに、各学級でも話し合いが行われ、学級ごとに「あいさつ」への取組目標を決定し、各学級で具体的な取組も行われた。

(10) 「あいさつアンケート」の取組と結果

本校児童の挨拶についての行動、認識を把握するために、質問紙による調査を行った。

・実施月：令和4年2月、令和4年6月
令和5年2月

・対象：本校児童

(R4.2月：532人、R4.6月：560人、
R5.2月：488人)

・方法：質問紙法

(3年以上は端末回答、1、2年は、ペーパーでの回答)

・調査項目

- 1 「あなたは、あいさつがよくできているか。」
- 2 「いつも行うあいさつはどれか。」
- 3 「あいさつをするのはなぜか。」
- 4 「あいさつ時に気をつけていることは何か。」

調査項目の観点は、1 挨拶（行為）の自己評価、2 挨拶の種類、3 挨拶の動機、4 挨拶時の意識の4点である。選択技法であり、2、3、4の項目は複数回答とした。

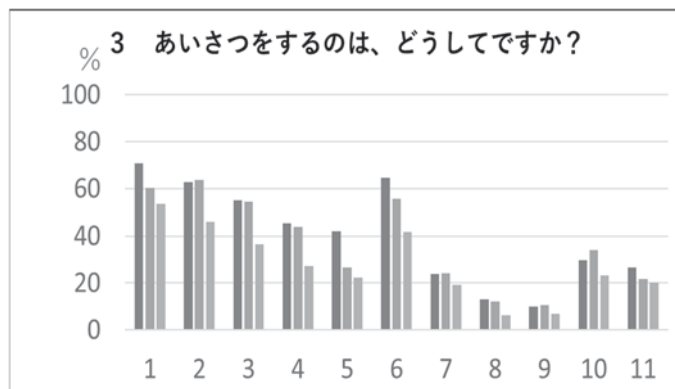
このうち、本稿では3の挨拶の動機について着目する。選択肢（※複数回答）は、以下のとおりである。

- ① じぶんが気もちがよいから。
- ② いろいろな人と仲良くなれるから。
- ③ 家の人や先生、ちいきの方々がよろこんでくれるから。
- ④ 友達がよろこんでくれるから。
- ⑤ みんながあいさつをするから。
- ⑥ 家の人や先生が、あいさつは大切だと話していたから。
- ⑦ 大人の人たちにほめてもらえるから。
- ⑧ 友達にほめてもらえるから。
- ⑨ あいさつをしないとおこられるから。
- ⑩ あいさつをしないと気もちがわるいから。
- ⑪ なんとなく。

挨拶の動機を選択肢として、①、②は「自己意識」、③、④は「相手意識」、⑤、⑥は「社会的影響」、⑦、⑧は「承認欲求」、⑨は「罰回避」、⑩は「習慣」、⑪は「漠然」と解釈できる11の選択肢を設定した。

結果が図1である。グラフの左が令和4年2月、真ん中が令和4年6月、右が令和5年2月を表している。

概観して、結果に大きな差はなく同様の傾向が見られる。結果から、動機としては①、②の「自己意識」、⑥の「社会的影響」が多く、次に、③④の「相手意識」が多い。また、⑧の「承認欲求」、⑨の「罰回避」は少ない傾向が見られる。これらの傾向より、⑥の結果から、児童は教師や保護者からの指導に影響を受けており、①～④の結果から、「承認欲求」や「罰回避」のために挨拶するのではなく、本来の挨拶の意義に基づいた挨拶という行為を行っていると考えられる。また、⑤「みんながあいさつをするから」（「社会的影響」）の変化が顕著であることは、自分の意思で挨拶する児童が多くなったことを表していると推察する。



【図1】挨拶の動機アンケート結果

5 成果と課題

(1) 成果

- ア いじめ防止対策の組織、体制を工夫し機能化させたことにより、いじめ認知件数が増えた。
- イ 本校における「あいさつ」指導の歴史や「あいさつ」指導とは何かについて、学校要覧や先行研究等をもとに整理することができた。
- ウ 全校朝会などでの児童への直接の働きかけや学校経営方針に基づいた職員への指導を通して、児童の挨拶がよい方向に向かいつつある。

(2) 課題

- ア 職員のいじめ認知の精度を高めて行く必要がある。
- イ 「あいさつ」指導についての本校での歴史や基礎的な研究を職員への指導に効果的に生かしていく必要がある。
- ウ 校内への来客、地域住民への挨拶も含め、児童の挨拶に個人差があることから、引き続き継続して意識付けを行っていく必要がある。

6 おわりに

キャッチフレーズ「笑顔であいさつ八幡っ子」という素晴らしい言葉が「絵に描いた餅」になってはいけない、また、本校で学んだからこそ確実に「あいさつ」を身に付けた人になってほしい、との思いから「あいさつ」指導に取り組んできた。実践は、述べてきたように、全校的、多角的な取組を心掛けてきたが、実際には「ただ繰り返し、繰り返し指導する」という言葉に尽きる実践であるように思う。

「八幡小を卒業したから挨拶ができるようになった」と卒業生が言えることを目指して、今後も取り組んでいきたい。